研究ノート

花街の新しい試み

―― 東京神楽坂「粋まち」と新潟「柳都振興」――

澤村　明

キーワード：花街，花柳界，まちづくり，神楽坂，新潟古町

はじめに[1]

本稿では，花街（かがい）あるいは花柳界における新しい動きについて，東京神楽坂地区と新潟古町地区を事例に取り上げる。

花街とは，辞書的定義では「遊女屋，芸者屋などの集まっている所。花柳界。遊里。色里」とされている[2]。すなわち，芸を売る街と色を売る街とを合わせた呼び名である。ただし歴史的には，1900（明治33）年に「娼妓取締規則」が発布されて売買春は一定の地区内のみで認められることとなり，基本的には芸を売る街と色を売る街はほぼ分離することになった（加藤政洋［2005］pp.18-19）。また第２次世界大戦後の売春禁止法（1956年）によって色を売る街はなくなったことになっており，今日，花街と呼ぶ地区は芸を売る街のみである。したがって，歴史的に使われる広義の「花街」には色を売る街も含まれるが，1956年以降の現代的な狭義の「花街」は芸を売る街のみであり，芸者・芸妓はいても娼妓はいない。本稿でも現代的な狭義の意味で用いる。

あるいは，置屋，待合，料亭の３業種が存在する街として，三業地という呼び方もある。また花柳界とも呼ばれるが，本稿では，業界として意味する場合は「花柳界」とし，地理的に呼ぶ場合は「花街」としている。

全国的な傾向として，花街は廃れている。接待や宴会に料亭を使っていた企業も経費節減で足が遠のき，年季奉公のような芸者修業の道に入る人も減った。地方によっては，芸者はいても地方（ぢがた）（三味線等踊りの伴奏者）がおらず録音した音楽の再生に合わせて踊るともいう。とはいえ，熊倉功夫［1995］が「日本の芸能の多くは，宴会の芸能であった」と書いているように，伝統芸能の多くは宴会の場である料亭等の座敷と深い関係があるし，料亭そのものが日本の伝統建築の粋を凝らした結晶ともいえる空間である。そうした面では，時代の趨勢に合わせて花

---

[1] 本稿は，科研費（挑戦的萌芽研究）22656131「伝統文化継承装置としての花街建築および景観の特性と計画論的課題」（代表：岡崎篤行）の成果の一部である。

[2]『日本国語大辞典』小学館による。

街が滅んで行くに任せてよいとはいえまい。

花街としてもっとも有名なのは，京都に存する祇園など六つの花街であろう。本稿で取り上げるのは，その有名なところではなく，東京の中堅どころである神楽坂と，地方の新潟古町の事例である。伝統的な置屋で芸妓を育てる花柳界が存続している京都に対して，神楽坂はまちづくり面で花柳界以外から新しい動きを見せ，新潟古町では置屋を株式会社にしており，そこに注目する。

歴史的には広義の花街があったために，今日でも花街に売買春のイメージを重ね,「悪所」と見なすエクリチュールが存在する。が，今日的な狭義の花街においては，それらは誤解であり，そうした歴史的経緯と無縁な世代は,「健全な」イメージを抱いている[3]。本稿で取り上げる事例は，そうした時代変化のもたらした，あるいは時代変化に乗った動きである。

１．神楽坂のNPO「粋まち」と株式会社粋まち

１－１．神楽坂　前史

神楽坂地区は東京都新宿区に位置し,東京に現存する花街の一つである[4]。神楽坂の花街は,現在の神楽坂５丁目にあった行願寺に茶屋ができ，それが次第に茶だけでなく酒を出すようになり，女性も置くようになって花柳界が始まったといわれている。1923年の関東大震災で銀座の商店が神楽坂へ移転するなどして，昭和10年代初めが最盛期であったという。その後は東京都市部のターミナル化と戦時体制でふるわなくなり，第２次世界大戦の空襲で被災する。戦後は1952年に「ゲイシャワルツ」が流行るなどで再び栄えたが，1970年頃から花柳界は左前になったらしい[5]。業界として不振でも，地区内には花柳界が伝えてきた長唄や能楽，新内などの古典芸能の師匠が多く住んでいて，それぞれの流儀の家元や，人間国宝も在住している。

神楽坂地区には町内会，商店会，業界組合など地縁系の各種団体が存在していたが，1991年に新宿区が委員を公募して「神楽坂地区まちづくりの会」が作られ，地区の都市計画的な将来像を話し合う場が始まった。この会は1992年に「神楽坂地区まちづくり推進計画」を作成して解散するものの，有志が継続的にまちづくりを協議する団体が発足する。1994年には「神楽坂まちづくり憲章」を作って新宿区長に報告,「坂のお江戸の粋なまち」を憲章の目標とした。その他，メンバーの中からタウン誌が発行されたり，1999年からは毎年秋に「神楽坂まち飛びフェスタ」というイベントを行なっている[6]。このころに，そうした住民の手弁当の運動を揺るがす

---

[3] 京都上七軒における，新旧の花街像のコンフリクトについては，参照，竹中聖人［2006，2007］。

[4] 現在でも現役の芸者が存在する花街は地区名五十音順に次の六つ。赤坂（料亭６，芸者32），浅草（料亭９，芸者47，幇間４），神楽坂（料亭８，芸者30），新橋（料亭12，芸者70），向島（料亭17，芸者120），芳町（料亭１，芸者20）。数値は2007年現在（浅原須美［2007］）だが，そのほとんどが減少している。

[5] 寺田弘からのヒアリング，2010年12月24日。および参照，法政大学ゼミナール紹介（澁谷信一郎）。

[6] 開催当初は「まちに飛び出した美術館」であったが，2000年から改称。運営は実行委員会方式で，住民や商店などが参加している。

事件が起こる。

1999年秋に神楽坂５丁目で，区道付け替えによって敷地を大規模化し，高さ95メートル，31階建て全290戸という大規模マンションを建てるという計画が明らかになった。この計画に対し，神楽坂に残る花街の雰囲気を壊すとして反対する住民が現れ，新宿区議会への陳情，区道付け替えを争点に区長提訴などの運動が行なわれた。この物件は，結果として高さ84メートル，26階建てとして着工され，アインスタワーという名称で竣工している[7]。

マンション計画に対しては，居住者が増えて町が賑わうからマンションに賛成という声もあって町内会では意見がまとまらず，結果としてマンション建設を阻止できなかった。このことから，神楽坂地区の歴史的環境の保全を考え，集まって活動する必要性を感じた有志で結成したNPOが粋なまちづくり倶楽部である。

１－２．NPO粋なまちづくり倶楽部[8]

特定非営利活動法人粋なまちづくり倶楽部（以下，「NPO粋まち」）は，「中世からの街区割りを残す，風情ある地区」（同倶楽部の案内）である神楽坂の空間や文化を継承することで，地区の発展に貢献することをミッションとしている。このNPOは，前述の神楽坂の高層マンション事件を契機に，神楽坂地区在住在勤の建築家や商店経営者などが集まって，2003年４月に東京都認証を受けた。前述のように，マンション計画に対して町内会では意見がまとまらず，マンションを阻止できなかったことから，神楽坂地区の保全を考える有志で集まり活動する必要性を感じたという。その活動の一環として各種の事業を行なうためには契約行為が生じるために，法人格を取得している。

新宿区という土地柄，上記アインスタワーのような巨大な開発でなくとも，まちの雰囲気を損ねる建設行為や近隣紛争が度々生じていた。NPOを作った目的はそうした事態に対処するためであったが，近隣紛争に特化しても受け入れられないので，「お住まいの悩みごと」からいろいろ「マンダラ」的に活動が広がっていったという。

事業報告書からNPO粋まちの活動を見ると，2003・2004年度はシンポジウム等が主であったのが，2005年度から伝統芸能等の保全活性化支援が主になっている。他に事業ウェイトの大きいものとしては，2003年度は商店会ホームページ作成受託があったほか，2007年度と2009年度に調査系の仕事を受けている。

財政規模を見ると，決算ベースで年間４千万円弱から１千800万円弱の収入であり，その過半を事業収入が占め，特に2007年から2009年では収入の９割以上を事業収入に拠っている。補助金も2005年度以降は受けていない。NPOの正会員（NPO法上の「社員」）数は設立時に28名で

---

[7] 同事件の総括は，参照，窪田亜矢［2003］。

[8] 本節と次節については，山下馨へのヒアリング，2003年８月20日，および，山下馨からのメール，2004年４月９日付。寺田弘からのヒアリング，2010年12月24日。日置圭子からのヒアリング，2010年12月24日，2011年７月22日，および日置圭子からのメール，2011年９月12日。および参照，矢原有理［2009］。

翌2004年に33名と増加したものの，その後は20数人で推移している（他にボランティアが220名ほど登録）。正会員は入会金１万円，年会費１万２千円であり，NPOというとイメージされるであろうボランティア中心の市民活動団体とはいいがたい。むしろ，まちづくりに取り組む事業主体と見るほうがふさわしい。

花柳界と協働するようになったのは2006年ぐらいからだという。設立当初は花柳界のトップに挨拶にいっても，さほど歓迎されなかったらしい。まちづくり事業の実績を積むことで，花柳界の協力を得て，花街という性格のイベントなども手がけられるようになったようだ。

１－３．株式会社粋まち

NPO粋まちから事業会社をスピンアウトさせたのが，株式会社粋まちである。NPO粋まちの有志が出資し，資本金１千万円で2007年９月に設立されている。法人の目的としては幅広くさまざまな業種を登記しているが，その１番目は「ツアー商品の企画・立案・実施」，２番目が「文化交流事業・各種イベントの企画・立案・運営」とし，代表取締役として日置圭子，その他取締役2名となっている。現在，従業員が２名である。

2009年から，地域に居住する人間国宝などの伝統芸能保持者がオムニバス方式で各20分程度の実演を行なう，「神楽坂伝統芸能」を実施している。能楽，長唄，箏曲，新内，舞踊を披露する「日本の伝統芸能絵巻」のほか，神楽坂落語まつりも開催されている[9]。

代表取締役の日置によれば，NPOの「活動のみでは不十分で，事業として企業と対等のパートナーシップを作って神楽坂の文化発展を進めたり，一定の高額な料金を払って神楽坂の伝統文化を楽しみ，隆盛に公演してくれる新たな客層を開拓するためには，『事業としての文化企画』が必要と考えて，株式会社粋まちの事業を進めて」いるという[10]。

１－４．キーパーソン，日置圭子[11]

このNPO粋まち，株式会社粋まちの双方に関わる，花街まちづくり事業のキーパーソンが日置圭子である。日置は早稲田大学政経学部卒業後，当時の日本興業銀行の調査畑に数年務め，出産を機に退社し，子育てをしながら非常勤講師などを務めていた。夫が以前から神楽坂のまちづくりに関わっており，日置一家も2000年に神楽坂地区に転入した。2003年頃から日置も神楽坂のNPO粋まちの活動等にかかわり出した。2004年からは「神楽坂まち飛びフェスタ」の実行委員長を務めている。

NPO粋まちは当時，中高年男性が中心となっており，行動力のある女性を求めていたということもあったようだ。上述の花柳界の協力も，日置が花柳界の組合理事長のところへ行ったこ

---

[9] 2011年は東日本大震災のため一部の開催となった。
[10] 日置圭子からのメール，2011年９月12日。
[11] 本節は，日置圭子からのヒアリング，2010年12月24日，2011年７月22日。および参照，法政大学ゼミナール紹介（日置圭子）。

とから実現した面がある。日置によれば,「遊びにお出で」といわれたので遊びに行って,「神楽坂が好きで，こういうことをしている」と茶飲み話を重ねていって，協力を引き出したという。

日置が実現させた事業の一つに，低料金のお座敷体験がある。神楽坂を案内すると，芸者への関心は高いものの，敷居も高いという話がよく出る。そこから，低料金での体験を，見番[12]の稽古場を使うことで実現した。芸者への花代も安くなるため不平も出たものの，客側が喜ぶだけでなく，芸者の側も若手の訓練になるとして毎年実施を望むようになるなど，意欲的だという。また色街との混同から見番への偏見もあったが,こうした機会に内部見学を行なうことで,怪しい場所ではないことが理解がされるという副産物も生じたらしい。

また2006年から「花柳界入門」というシンポジウムを６回開催し，神楽坂の組合理事長による講演，浅草の幇間の実演，三味線演奏，お座敷遊びなどを行なった。これらの事業実施によって，花柳界からの協力が仰げるようになったという。

２．新潟の株式会社柳都振興

２－１．概要

新潟市には古町という花街が存在する。江戸期には何カ所に広義の花街があったものを，明治20年代に続いた大火を契機に，新潟県が市内の遊郭を整理移転し，古町地区には狭義の花街が形成された[13]。現在の古町通八番町･九番町の一角である。戦災にあわず，1964年の新潟地震でも被害を受けなかったため,明治期から戦前の花柳界の雰囲気を伝える街並みが残っている。

古町には今でも三業組合があり，見番としての業務を行なっている。料亭が16，芸妓が26名存在している[14]。芸妓のうち10名は株式会社柳都振興の社員であり,いわば　芸者である。以前から存在する置屋所属の芸妓と区別するため「柳都さん」と呼ばれている。

株式会社柳都振興（以下,「柳都振興」）は，全国初の「芸者置屋の株式会社」として，1987年に資本金７千万円で設立された。商工会議所が中心となり，料亭など花街関係者，新潟の財界人，企業などが出資している。現在の株主数は80人弱である。設立当初は1982年に上越新幹線が開通したことで，新潟の観光振興を考えていたらしい[15]。「湊町･新潟」をPRするために古町の花柳界を復興したいという狙いがあり，柳都振興を立ち上げたさいの中心的存在であった中野進は，以下のように語っている。

---

[12]「検番」とも書く。

[13] 新潟の花街についての通史は，参照，藤村誠［2011］

[14] 料亭数には，古町地区以外の料亭３軒を含む。古町以外の料亭も三業組合に所属しているため本論でも含めた。また新潟では芸者を一般に「芸妓」と呼び，芸妓の中でも，他地区で半玉と呼ぶ若年層を「振袖さん」と呼び分ける（京都の舞妓）。芸妓数は2011年５月末現在（参照，藤村誠［2011］）。

[15]「探訪～新潟の芸妓文化を考える　その③～　柳都振興株式会社」『(財）新潟経済社会リサーチセンターセンター月報』2006年６月号

柳都振興を立ち上げた（1987年に）は，一番若い芸妓が36～37歳になっていたんです。彼女たちは10代で芸妓になるから，すでに20年くらいは芸妓のなり手が出てこなかったということです。これを放置しては何年か後には芸妓が絶えて，料亭もだめになる。これは交流によって街が成り立ってきた新潟にとっては，芸妓，料亭に限らず産業界全体の問題でもあります。それで考えたのが置屋の株式会社化。当時私は新潟交通の経営に関与していましたから，いわば観光も生業の一つで会社との繋がりもなくはなかった。それで皆に声をかけ，資本金の7,000万円は産業界からの出資ですぐに集まりましたね。

後に他の県でもその方式を参考にして地域の料亭文化を守ろうとしたのですが，失敗に終わったところもあるようです。よそが失敗して新潟がうまくいったのは，三位一体の協力の賜物だと思います。料亭に世話になってきた財界と，料亭の主たちと，それまで自分の才覚と腕だけでがんばってきた現役の芸妓，姐さんたち。この３者が料亭文化を未来につないでいこうと協力できたところが，うまくいった最大の要因です。特に姐さんたちは，大きな心で柳都振興の新入社員（若い芸妓）を育ててくれました。お座敷というのは，若い子がいればそれでいいというものではないんですね。姐さんたちが場の雰囲気を作るんです。彼女たちが若手をもり立てて励ましてやらなければ柳都振興は育たなかった[16]。

また柳都振興の芸妓を支援する目的で，2000年12月には地元企業や新潟に支社を持つ企業など約70社で「柳都振興後援会」を作っている。年会費10万円を集め，習い事や発表会参加の支援，衣装等の購入の助成を行なっている。

２－２．株式会社で芸妓は育てられたか

表は柳都振興に在籍した芸妓の在職期間等を入社順に一覧にしたものである。退社年月が空欄になっている者が，2011年７月現在で現役の「柳都さん」10人である。これまで41人が入社し（うち３人は一旦退社し復職），うち６人が振袖から留袖へ「襟替」を経て一人前になっている。襟替を経て留袖になったのは34人中６人である[17]。襟替するまでの振袖の期間を見ると，７年強が３人，14年が一人，不明が二人となっている。

退職するか襟替するまでの振袖の在職期間を見ると，３年未満が14人と４割強であり，３年以上務めた者では平均在職期間が６年９ヶ月である。高校を出て18才で入社し，１,２年で辞めるのが４割，残ったものも20代後半で辞め，留袖になって本格的に花柳界に残るのは６人に一人である。なお，退職理由は，筆者が聞いた限りでは結婚退職，進学，家業継承，転職とさまざまであるらしい。

---

[16] 新潟文化物語～特集 vol.19「新潟芸妓と料亭文化」～芸妓を絶やすな，
http://www.n-story.jp/special/19/page3.html，2011年９月１日閲覧。

[17] 現役の振袖７人を除く。なお，芸妓の世界における襟替の割合は不明であるため，この柳都振興の34人中６人という割合が高いのか低いのかは判断できない。

入社理由が判明している近年の者について見ると，2008年から高校生相手の就職説明会に参加していることもあるのか，高校の就職担当者からの紹介やハローワーク経由という者がいて，一般の就職と変わらないことがうかがえる。またホームページを見て入社したとか，芸妓になりたくて高校卒業後１年間待っていたという者がいるあたりは現代的である。なお，過去には24，25才で入社した者もいたが，近年の募集条件では18才から22才の高卒以上の者とされている。

No	入社年月	退社年月	入社時年齢	最終学歴	襟替時期	在職年数*	備　　考
1	1988.1	1990.4				２年３ヶ月	
2	1988.1	1988.12				11ヶ月	
3	1988.1	2005.5	25	専門学校	（不明）	17年４ヶ月	退職まで
4	1988.1	1994.7	24			５年７ヶ月	途中退職11ヶ月
5	1988.1	1989.6				１年５ヶ月	
6	1988.1	2000.1	21		（不明）	12年	退職まで
7	1988.1	1989.5				１年４ヶ月	
8	1988.2	1991.12	21			３年10ヶ月	
9	1988.3	2008.11	18	高等学校	2001.3	７年２ヶ月	途中退職５年10ヶ月
10	1988.3	1989.8				１年４ヶ月	
11	1989.3	1999.12	19	高等学校		10年９ヶ月	
12	1989.3	1990.3				１年	
13	1989.3	1992.3	18	高等学校		３年	
14	1990.2	1991.2	22	高等学校		０年11ヶ月	
15	1990.2	1991.8	18	高等学校		１年５ヶ月	
16	1990.9	1995.8	25			４年10ヶ月	
17	1991.3		18	高等学校	2005.10	20年６ヶ月	
18	1991.3	2000.3	18	高等学校		８年11ヶ月	
19	1992.3	1996.1	22			３年９ヶ月	
20	1993.2	1994.2	22			１年	
21	1993.3		20	高等学校	2001.12	７年８ヶ月	途中退職３ヶ月
22	1995.3	1998.3	18	高等学校		２年11ヶ月	
23	1995.3	1998.3	18	高等学校		２年11ヶ月	
24	1995.3	1998.7	18	高等学校		３年３ヶ月	
25	1996.3	2005.7	19	高等学校		９年４ヶ月	
26	1996.3	2000.3	18	高等学校		４年	
27	1999.1	2003.2	22	短期大学		４年	
28	1999.4	2002.11	18	高等学校		３年７ヶ月	
29	2000.6	2005.4	21	専門学校		４年10ヶ月	
30	2002.9	2003.12	21	専門学校		１年３ヶ月	
31	2004.4		18	高等学校	2011.3	７年４ヶ月	
32	2005.3		18	高等学校			
33	2005.3		18	高等学校			
34	2006.3	2009.3	18	高等学校		２年11ヶ月	
35	2006.3	2010.6	19	高等学校		４年３ヶ月	
36	2006.3	2008.3	18	高等学校		１年11ヶ月	
37	2009.3		18	高等学校			
38	2009.3		18	高等学校			
39	2010.4		20	短期大学			
40	2011.3		18	高等学校			
41	2011.3		18	高等学校			

表　株式会社柳都振興の振袖在籍一覧

株式会社柳都振興提供資料による（注：退社年月が空欄は2011年７月現在現役。入社時年齢・最終学歴が空欄は不明。No．３とNo．６は襟替の時期が不明なため，在職年数は退社年月までとしている）。

柳都振興の経営状況は次の通りである。2005年から2010年までで見ると，芸札数（芸者が呼ばれた延べ数）は年間３万５千から４万で推移し，芸者への需要は大きく減っていないものの，芸札収入だけでは毎年数百万円の赤字になっており，累積赤字も５千万円に上っている。前述の柳都振興後援会から毎年度900万円程度の寄付を受けて経常黒字にしている状態である。ただし，地方の花街においては，芸妓を支援する仕組みを作って支えているところが多いので，後援会による下支えをもって経営状況を判断すべきではなかろう。経費内訳で見ると，人件費が６割を占めるほか，着物や鬘の修理代が１割，三業組合・芸妓置屋組合への諸会費と稽古代を含む雑費がそれぞれ約７％となっている。

おわりに－若干の考察

花街，花柳界，芸妓とも，かつては負のイメージを負っていた。が若い世代には無縁であるらしく，和服を着て仕事をするプロフェッショナルとしての芸者，というイメージもあるらしい。神楽坂でもインターネットで見て芸者に入門する女性がいるとのことであり，東京向島にもホームページで「舞妓（半玉）・アルバイト募集」としている置屋がある[18]。京都の舞妓も志望者がそれなりに続いているらしい（西尾久美子［2007］pp.25-27）。

神楽坂の関係者によれば，東京の花街は，新橋が政界の接待の場，赤坂も類しており，その一方，向島は観光地化し，浅草も観光地に近づいていて，神楽坂はその中間的な存在だという。向島では週末だけ務めるパートタイム芸者が増え，浅草ではオーストラリア人芸者がいるという風に，良くいえば新しい工夫がされているし，悪くいえば伝統芸能の継承に黄信号が灯っているともいえる。

神楽坂は，2007年にはフジテレビ系列で神楽坂の料亭を舞台にした「拝啓，父上様」が放映されるなど，風情のある花街として社会的に認知されているといってよい。また神楽坂は日仏会館が近いこともあるのか，フランス料理店が多く，フランス人も多いという[19]。このグローバルでありながら伝統芸能も息づく，「女が男を育てる町」[20]ともいわれる花街の風情を継承すること，伝統芸能界と協働し続けていくことは，日置をはじめとするNPO粋まち，株式会社粋まちにかかっている。

神楽坂の取り組みについては，伝統芸能の人間国宝などの継承者が地域に居住していて協力的であるということや，東京という商圏に位置することも大きく，他の地方では参考にしにくい。が神楽坂においても，各種イベントが軌道に乗るまでに数年の努力を続けていて，その継続的努力を支えるNPOなどの仕組みは注視に値する。

---

[18]「向島での芸者・舞妓（半玉）さん，アルバイトの募集 - 向島 花いち」，http://hanaichi-web.com/recruit.php，2011年９月１日閲覧。
[19] 日置圭子からのヒアリング，2010年12月24日。
[20] 寺田弘からのヒアリング，2010年12月24日。

新潟の柳都振興のように置屋を企業化するという方法は，他の地域からも関心はよせられているようで，類似の方法で継続している事例としては，山形商工会議所が1996年に山形市内の企業に呼びかけて設立した，山形伝統芸能振興株式会社による「やまがた舞子」[21]がある。ただ，中野の発言にもあるように，どこでも上手く進んでいるとはかぎらず，花柳界維持のための解決策といえるかは不明である。

柳都振興は，雇用面ではOLと変わらない。芸妓の募集を待って入社したという「柳都さん」も存在するなど，上述の若い世代が抱く明るいイメージに上手くマッチしているといえよう。ただし，これまでのところ，襟替を経て留袖になる割合は高いとはいえない。また新潟で彼女たちに芸事を教える筋から聞いたところでは，人前で披露するレベルの芸を身に付ける前に座敷に出さねばならず，見よう見まねで２，３の型を真似しているだけになることもあるとのことである。伴奏を務める地方などの育成は，新潟においても他の地域と同様，充分とはいえず，芸能の継承には不安が残る。

新潟古町で聞いた話では，座敷に上がる客の側の理解も必ずしも充分とはいえず，芸妓を和服コンパニオンと見なし，芸妓を呼んでも，「芸は良いからはやく酌を」と求める客もいるという。新潟以外でも同様のエピソードは耳にする。皮相な言い方をすれば，芸妓ではなく酌婦を求めるだけの客には，踊る真似をするだけの若い和服コンパニオンが相応しいのかもしれない。その延長には，東京のように週末パートタイム芸者もあるだろう。が，伝統芸能を伝統的な座敷空間で堪能し，その実演者を応援することが花街の使われ方であるなら，神楽坂のような花柳界以外からの働きかけと，新潟のような経営的な近代化とを踏まえて，新しい方策が必要にも思える。

新潟には，19世紀半ばから続く日本舞踊の家元，市山流があり[22]，古町芸妓を指導している。その家元が芸能の継承に積極的であり，毎年，彼女の振付指導によって，市のホールで古町芸妓による舞踊を発表している。2011年にはまちづくり系市民団体主催で，この舞踊発表と連携した事前勉強会を開催するなど，財界以外から花柳界とタイアップする動きも出てきた。

一般論として花柳界は，パトロンとしての「旦那衆」が支えて成り立っていた。今でも同じシステムで存続しているのは，京都と東京の一部だけであり，東京の残りと全国その他の花街は衰退し，多くが廃絶しつつある。花街を地域社会で継承していく必要があるのかの問い直しも含めて，神楽坂や新潟の事例は，参考になるだろう。

---

[21]「舞子さんは会社員　山形，伝統芸能を受け継ぐ」，http://www.47news.jp/CN/200712/CN2007120801000377.html，2011年10月20日閲覧。

[22] 市山流は2003年に新潟市無形文化財第１号に指定されている。

参考文献

浅原須美［2007］『東京六花街　芸者さんに教わる和のこころ』ダイヤモンド社。

加藤政洋［2005］『花街』朝日新聞社。

窪田亜矢［2003］「各主体の動向に基づくマンション紛争防止に向けた考察－神楽坂超高層マンション計画を事例として－」『都市計画論文集』No.38-1，pp.52-57。

熊倉功夫［1995］「宴会史序説」，サントリー不易流行研究所編，端信行監修『宴会とパーティー』都市出版，pp.107-133。

竹中聖人［2006］「歴史的環境としての花街とまちづくり」*Core Ethics* Vol. 2，pp.153-164。

竹中聖人［2007］「花街の真正性と差異化の語り－北野上七軒と五番町をめぐって－」*Core Ethics* Vol. 3，pp.249-259。

西尾久美子［2007］『京都花街の経営学』東洋経済新報社。

藤村　誠［2011］『新潟の花街』新潟日報事業社。

法政大学ゼミナール紹介　キャリアデザイン学部梅崎ゼミ「地域活動とキャリアデザイン－神楽坂で働く，生活する－『粋』な遊び』－澁谷信一郎（料亭「千月」主人，東京神楽坂組合理事長）」（http://www.hosei-web.jp/semi/04/3.pdf，2011年９月１日閲覧）

法政大学ゼミナール紹介　キャリアデザイン学部梅崎ゼミ「地域活動とキャリアデザイン－神楽坂で働く，生活する－『よそもの・ばかもの・わかもの』－日置圭子（「NPO粋なまちづくり倶楽部」副理事長）－」（http://www.hosei-web.jp/semi/04/7.pdf，2011年９月１日閲覧）

矢原有理［2009］「神楽坂における地域主導による保全まちづくりの展開－地区の変容が組織体制に及ぼした影響に注目して－」東京大学大学院工学系研究科修士論文。